



ドキュメンタリー映画

OYAKO

-present to the future-

親子って何だろう？

子どもだから感じられた空気感、親になってこそわかる愛情。
そんな言葉にできない親子の関係を、もう一度確認して見ませんか。



世界のどこにもない「日本の親子」

30年ほど前、ロサンゼルスで活躍していたフォトグラファー、ブルース・オズボーンは日本にやって来た。彼は外国人の視点で日本を斬新にとらえ、注目を浴びた。雑誌の依頼で、モヒカンのパンクロッカーを撮ることになり、母親と一緒に彼をフィルムに収めた。ギャップを狙ったはずの写真に写し出されたのは、親子の一体感だった。それ以来、彼は、4500組もの親子写真を撮り続ける。英語にない「親子=OYAKO」という言葉の中に日本独特のカルチャーを発見した彼は、日本人の親子関係に深く興味を持つようになる。2003年には「親子の日」を提唱し、親子の大切さを社会に問いかける活動もはじめる。2011年、東日本大震災の傷が癒えない被災地で撮影した親子からは、逆境に負けない力強さを感じた。親子写真を撮り続けるうちに彼は「日本の親子」の中に、世界に問うべき大切なメッセージを発見していく。「Present to the future」…親子という関係こそ私たちが大切にすべき「未来への贈り物」なのだ。

「親子」は日本独特の文化です

Bruce Osborn / 写真家

1980年来日して以来、さまざまな職業や背景を持った家族をファインダー越しに見てきましたが、親と子の間に存在する絆(英語ではbondでしょうか)に対して日本人が持つ独特な感覚は、私のような欧米人にとって、とても新鮮で素晴らしいものです。日本語の「親子」という言葉が持つニュアンスは、他の言語ではうまく表現しきれないものがあります。私の母国語である英語にも同様の言葉はありません。私には、この「親子」という概念がとてもユニークで、もしかしたら日本の独特な文化を醸成してきた根幹は「親子」にあるのでは、とさえ思えるのです。



「自分にとっての親子」を考えながら観てください

イノマタトシ(猪股敏郎) / 映像監督

日本の親子写真を30年も撮り続けているブルース。何がそんなに彼を惹きつけるのか？ブルースの視点から「親子」というテーマを捉えてみたいと思い、この映画の制作を始めました。親子の関係を「絆」という言葉で簡単に片付けるのではなく、その中に何があり、親子という関係が私たちにとってどんなに根源的であるのか。また、親子関係が宿す面白さとは何なのか。この映画を観て、もう一度、「自分にとっての親子」を考えてもらうきっかけになれば、うれしく思います。



監督: イノマタトシ(猪股敏郎) 総合プロデューサー: 井上佳子 脚本: 渡辺 熱

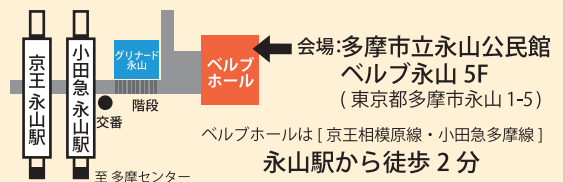
プロデューサー: 石井正人 関智 音楽: Morgan Fisher Rickie-G CHAN-MIKA 濱田貴司 吉村龍太 製作: 「親子の日」普及推進委員会
協賛協力: オリジナル株式会社 オートイコン株式会社 株式会社協同商事 協同組合日本写真館協会 下松フィルム・コミッション 株式会社円谷プロダクション



主催: TAMA 映画フォーラム実行委員会
お問合せ(電話): 080-5450-7204(事務局直通)
042-337-6661(永山公民館代表)
※上映当日は 070-5580-9071(会場)へ

Twitter で最新情報をフォロー
@tamaeiga

Facebook ページに「いいね」で参加
<http://www.facebook.com/tamaeiga>



会場: 多摩市立永山公民館
ベルブ永山 5F
(東京都多摩市永山1-5)
ベルブホールは [京王相模原線・小田急多摩線]
永山駅から徒歩 2分